子どもを中心に保育の実践を考える

～保育所保育指針に基づく保育の質向上に向けた実践事例集～

2019（令和元）年６月

厚生労働省

はじめに

保育所保育においては、子どもを権利の主体として位置づける児童福祉の理念の下、子ども一人一人について、その人格を尊重し、生活や遊びを通して健やかで豊かな育ちを支え促していくことが求められます。こうした保育の基本的な理念を引き継いだ上で、保育をとりまく社会情勢の変化を踏まえ、保育所保育指針の改定が行われ、2018（平成 30）年 4 月から適用が開始されました。

各保育所等における保育は、保育所保育指針を共通の基盤としながら、各々の保育の理念や方針等に基づき、子どもの実態や家庭・地域の実情に即して行われます。また、保育の質の向上に当たっては、各現場で、目の前の実際の子どもの姿をもとに、保育実践をより良いものにしていく取組が日常的・継続的に行われることが重要です。今回の保育所保育指針の改定をひとつの契機として、各保育所等で自分たちの日々の保育を改めて指針に照らし、子どもを中心に据えた視座から捉え直してみることにより、こうした保育の質の向上に向けた取組が、より一層定着・進展していくことが望まれます。

一方で、保育の改善・充実の取組を進めていくには、職員間の対話を通じて組織として自園の理念や現状・課題に関する共通理解を図るとともに、保護者や地域住民をはじめ、多様な関係者とも保育について理解を共有し、連携することが必要となります。

これらのことを踏まえ、各保育所等における保育実践の参考となるよう、今般、「子どもを中心に保育の実践を考える　～保育所保育指針に基づく保育の質向上に向けた実践事例集～」（以下、「本事例集」という。）を作成し、保育の現場における身近な課題に対する“等身大”の取組事例を紹介することとしました。本事例集の趣旨や内容が、保育士等はもとより、行政機関や大学等の指定保育士養成施設などの関係者、さらには、子育て中の保護者など、保育に関わる多くの方々に広く浸透し、各保育所等における創意工夫ある保育実践の充実に役立てられることを願っています。

本事例集の作成にあたり、終始熱意を持ってご尽力いただいた協力者・協力園の皆様に、心より感謝の意を表する次第です。

2019（令和元）年6月

厚生労働省子ども家庭局保育課

※ 本事例集の作成経緯について

2018（平成 30）年４月から改定保育所保育指針が適用されたことなどを踏まえ、同年５月以降、厚生労働省子ども家庭局において、「保育所等における保育の質の確保・向上に関する検討会」を開催しています。本検討会では、構成員や保育の関係者（事業者等）による意見発表等を行い、同年９月、「中間的な論点の整理」を取りまとめました。

本事例集は、本検討会の下に設置した作業チームにおける検討を経て、本検討会で発表された様々な保育の現場における取組事例について、「中間的な論点の整理」において示された検討事項に関連づけて集約・整理したものです。

目　次

本事例集の活用に当たって ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・２

基本編　自園の保育を捉え直す *～子どもを中心とした視点から～* ・・・３

事例編　保育の各現場における課題に応じた取組の事例・・・・・９

① 対話的な職場風土づくりのための工夫を活かす

事例１：日々の対話を大切にする協働的なリーダーシップ・・・・・・・・・・・・１１

事例２：それぞれの良さが引き出される職場風土 ・・・・・・・・・・・・・・・・・１３

事例３：行事の見直しを通して、職員間で対話を繰り返す ・・・・・・・・・・・・１５

事例４：担当保育士との関わりを中心とした保育の実践 ・・・・・・・・・・・・・１７

② 記録や計画、発信物の工夫を活かす

事例５：記録の作成と対話を通して保育を振り返る ・・・・・・・・・・・・・・・２１

事例６：記録から丁寧に子どもの姿を読み取り、同僚や保護者と共有する・・・・・２３

③ 園内外の研修を活かす

事例７：事例や写真などを用いた保育の質の向上につながる園内研修・・・・・・・２７

事例８：公開保育や研修での学びを踏まえた園内研修と保育の見直し・・・・・・・２９

事例９：外部研修での学びを園内研修に取り入れ、保育環境の改善に活かす・・・・３１

事例 10：公開保育を通して次の保育につながる新たな気づきや発見を得る・・・・３３

④ 環境構成の工夫を活かす

事例 11：子どもの主体性を尊重する保育を目指し、環境構成を工夫する・・・・・３７

事例 12：目的やイメージを共有する園庭づくり・・・・・・・・・・・・・・・・・３９

⑤ 保護者や地域の人々との連携を活かす

事例 13：保育を丁寧に伝える工夫と保護者の保育への参加・・・・・・・・・・・４３

事例 14：子どもの遊びや活動の実現のために、保護者や地域の人々との連携を活かす・・４５

本事例集の活用に当たって

本事例集は、各保育所等がそれぞれの現状や課題に応じて創意工夫を図り、保育実践の改善・充実に向けた取組を進めていくことに資するよう、以下のような構成となっています。

（基本編）

○　保育の各現場において、保育所保育指針に基づき、「子どもにとってどうなのか」という子どもを中心とした視点から保育を振り返り、捉え直すことを通じて、自園の現状や課題を把握し、保育実践の改善・充実に向けた今後の取組の方向性を明確にすることの意義について記載。

○　現状や課題を踏まえ、今後の取組を進めていく上で重要となる３つのポイントと併せて、これらに関連して考えられる現場の具体的な課題の例と参照事例を記載。

（事例編）

○　基本編を踏まえ、具体的な取組の実施に当たって参考となる事例を紹介。

※　本事例集は、各保育所等における取組の充実や課題の解決に役立てていただくために作成されたものです。基本編のⅠ～Ⅲの各ポイントに関連するものとして示した「課題の例」と類似した課題は、多くの保育所等でも抱えているものではないでしょうか。これまでの保育を変えていくことは難しいと思いがちですが、どこの保育所等でも、取り組み方などを少し工夫してみることは可能です。

事例編では、具体例を通して、保育の質向上のための取組の参考となるような事例を紹介しています。**ここにあげた事例は、必ずしも「ベストな取組」や「理想的な取組」を示したものではありません。それぞれの保育所等が、難しさを感じながらも、自分たちの保育所等の実情に即して、これまでのやり方を少し工夫することで、課題解決の糸口を見いだしてきた“等身大”の事例です**。それぞれの事例の最後に各事例における課題解決のポイントも示しています。ぜひ、みなさまの保育所等の園内研修をはじめとする様々な場面で活用していただければ幸いです。

基本編

自園の保育を捉え直す *～子どもを中心とした視点から～*

（保育所保育指針に基づく保育実践）

○　保育所保育指針に示される保育の基本的な考え方は、各保育所等において保育の質の確保・向上を図っていく上での共通の基盤となります。

＜保育所保育指針に基づく保育の基本的な考え方（例）＞

- 子どもが安心感と信頼感をもって活動できるよう、子どもの主体としての思いや願いを受け止めること
- 子どもの生活のリズムを大切にし、健康・安全で情緒の安定した生活ができる環境や、自己を十分に発揮できる環境を整えること
- 子どもが自発的・意欲的に関わることができるような環境を構成し、子どもの主体的な活動等を大切にすること
- 乳幼児期にふさわしい体験が得られるように、生活や遊びを通して総合的に保育すること

○　このように、保育においては、子どもを権利の主体として位置づけ、その最善の利益を考慮するとともに、乳幼児期が生涯にわたる人格形成にとって極めて重要な時期であることを踏まえ、一人一人の主体性を尊重することが求められます。

（子どもを中心とした視点から自園の保育実践を捉え直す）

○　保育所等における保育において、「子ども一人一人の主体性を尊重する」ということは、保育士等が子どもに何も働きかけず、単に子どもを好きなように遊ばせておけばよいということではありません。乳幼児期の発達の特性や過程と、個々の子どもの状況や興味・関心を踏まえ、子どもが自ら関わりたくなるような環境を構成し、活動が豊かに展開していく中での学びや育ちを保障することが大切です。

○ そのため、子どもの主体性を尊重する保育の実現には、まず実態から子どもの育ちや内面を理解することが必要となります。日々の保育において子どもが体験していることや、子ども同士のやりとり、保育士等との関わりなどを「子どもにとってどうなのか」という視点から丁寧に捉え直してみることによって、保育の現状や課題を把握し、改善・充実の手がかりを探る糸口が見えてきます。

（改善・充実に向けた取組を進めていくに当たってのポイントと課題）

○ 子どもを中心とした視点から保育を捉え直すことによって改めて見えてきた現状や課題について、どのような改善や充実を目指していくのか、そのために具体的にはどのような取組が必要となるのか、創意工夫としてどのようなことが考えられるのかを検討することが重要です。

○ それらの具体的な内容は、保育の現場や地域の特性によって異なるものの、取組を実行していく上で重要となることと課題となることに関しては、多くの現場で、ある程度、類似・共通して見られる要素も多いと思われます。

○ こうしたことを踏まえ、本編（基本編）では、各保育所等において、難しさを感じていることや、今後充実させたいことに関して取組を進めていく際、共通して重要になると思われる主なポイントとして、以下の３つを示しています。

Ⅰ：職員間の共通理解

Ⅱ：日々の保育の振り返り

Ⅲ：保護者や地域の人々との関係づくり

○ さらに、上記の各ポイントに関連して考えられる具体的な課題も併せて例示した上で、これらを踏まえて、どのような工夫や配慮が考えられるのか、今後の取組を考える際に参考になると思われる事例を次編（事例編）に示しました。

Ⅰ：職員間の共通理解

○　子どもを中心に自分たちの保育のあり方を考え、保育の質を確保・向上させていくには、自園の保育に関する職員間の共通理解を高めていくことが不可欠です。自園の保育の理念や方針、子どもの姿や家庭に関する情報等を共有するとともに、日々の保育が子どもの主体性を尊重したものとなっているか、園の理念が保育実践に反映されているかといった視点から、自分たちの保育の実践（例えば、行事のあり方や保育の形態など）の現状や課題を組織全体で改めて検討してみることが大切です。

○　このように職員間で保育に関する共通理解を図っていく過程において、子どもの姿について語り合うことは、職員一人一人にとって、自分自身が気づかなかった子どもの姿を知るだけでなく、同じ場面について、異なった視点からの捉え方があることを知り、「子どもの理解」のあり方を学び、深めていく機会になり、自らの保育を省察することにもつながります。

○　こうした保育に関する共通理解の促進に当たっては、日常の打ち合わせなどの他、園内研修を活用することなどが考えられます。その際、指導する側とされる側、評価する側とされる側といった関係ではなく、相互に学びあう関係となるよう、互いに相手の話を共感的に聞く姿勢を持つことが重要です。

“職員間の共通理解”に関連して考えられる「課題の例」	参照事例
・職員間の打ち合わせや園内研修の際に、職員の発言が少ない、発言者が限られるなど、職員同士が主体的に話し合える環境が整わない	事例１（１１頁） 事例２（１３頁） 事例７（２７頁）
・職員間で子どもの姿を語り合うための時間や、素直に思いを語り合える場の確保が難しい	事例１（１１頁） 事例２（１３頁） 事例５（２１頁）
・園内研修の時間がなかなか確保できない	事例７（２７頁）
・保育士からの指示や働きかけ、指導が中心の保育になりがちで、どのようにして子どもの主体性を尊重した保育へと変えていったらよいか分からない。	事例３（１５頁） 事例４（１７頁） 事例 11（３７頁）
・行事の見直しを検討しているが、出来栄えや結果を重視する傾向にある。行事の練習や準備が毎日の保育の活動の中心になりやすい。	事例３（１５頁）
・公開保育や外部研修に参加しても、その学んだ内容を自分たちの保育の改善になかなか応用できない。	事例８（２９頁） 事例９（３１頁） 事例 10（３３頁）

Ⅱ：日々の保育の振り返り

○　継続的に保育内容の充実を図り、保育の質を向上させていくためには、日々の子どもの姿や育ち、保育士の関わりや保育の環境構成などについて、保育の各現場において、日々の記録等をもとに振り返ることが重要になります。

○　保育の振り返りから子どもに対する気づきを得て、子どもの内面や発達についての理解を深めていくことは、子どもの実態に即して保育を充実させていくことにつながっていきます。

○　こうした日々の保育の振り返りを踏まえ、保育の見直しを行うことで、保育実践の改善や充実の方向性や手立てが明確になっていきます。それらは、明日の保育や、翌週・翌月の保育の計画に反映されるとともに、子どもが自ら関わり、豊かな活動が展開されるような環境を構成していくことにつながります。こうした保育の振り返りと見直しを繰り返していくことを通じて、より良い保育が展開されていきます。

“日々の保育の振り返り”に関連して考えられる「課題の例」	参照事例
・日々の保育の振り返りのための時間がなかなか確保できない。	事例５（２１頁）
・保育の記録（日誌等）、保護者へのおたよりなどの書類作成業務が多い。また、どのように日々の記録を保育の充実や改善に向けた取組に活かせばよいのかが分からない。	事例５（２１頁） 事例６（２３頁）
・子どもの生活や遊びの様子に合わせて保育の環境を充実させようとしても、限られたスペースの使い方や保育室などの空間をうまく分ける方法が具体的に分からない。	事例 11（３７頁）
・どのような環境の構成が子どもにとって望ましいのか分からない。	事例４（１７頁） 事例 11（３７頁） 事例 12（３９頁）

Ⅲ：保護者や地域の人々との関係づくり

○　保育所等においては、保護者との緊密な連携の下に保育を行い、また、地域の人々との関係づくりを進めていくことが大切です。保育の質を確保・向上させていくためには、保護者や地域の人々と共に子どもの育ちを支えていくことができるよう、開かれた保育所等の運営が求められます。

○　保護者や地域の人々が保育所等における保育への理解を深めることができるよう、例えば、子どもの姿や育ち、各保育所等における保育の取組内容などを分かりやすい形で発信することや、保護者等が保育に参加・参画していく機会を広げていくことが考えられます。具体的には、送迎時の会話や、連絡帳やおたより、写真などを用いた記録の発信、保護者の保育への参加、日々の保育や行事の機会における地域の人々との交流などが考えられます。様々な手段や機会を通じて、保護者や地域の人々との関係を築くとともに、より良い保育をともに作っていくことが重要です。

“保護者や地域の人々との関係づくり”に関連して考えられる「課題の例」	参照事例
・保護者や地域の人々との連携を大切にしているが、保育所側の思いがなかなか保護者に伝わらない。	事例６（２３頁） 事例 13（４３頁） 事例 14（４５頁）
・保育所の活動へ参加や参画を求められることに負担を感じる保護者もいることから、どのように呼びかけたらよいか迷う。	事例 13（４３頁）
・地域の人々と連携した取組を行っても、なかなか保育の質が向上した効果を実感しづらい。	事例 14（４５頁）

事例編

保育の各現場における課題に応じた取組の事例

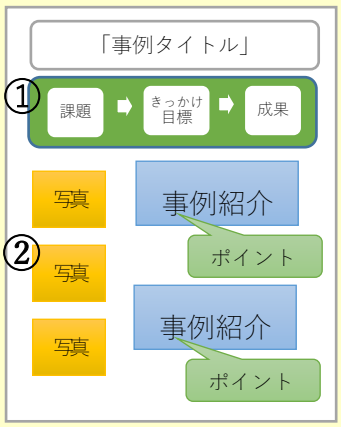
【本編における事例について】

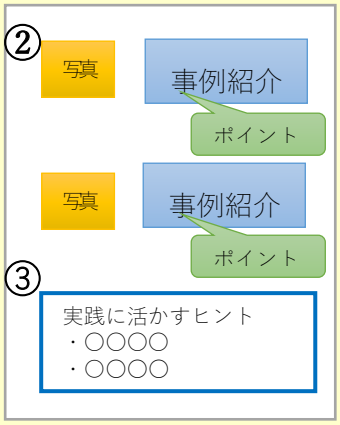
○　ページ構成（それぞれの事例は見開き１ページで紹介しています）

①　事例の概要
（課題→きっかけ・目標→成果）

②　取組の状況及びポイント
（写真等・文章）

③　事例を自園の実践に活かすためのヒント





○留意点

本編で紹介する事例は、「こうすべき」という目標や理想を示すものという位置づけではなく、同じような課題を感じている保育所等において実践のヒントとなるよう、取組の方向性や具体的なポイントを示すものです。

①　対話的な職場風土づくりのための工夫を活かす

事例１：日々の対話を大切にするための協働的なリーダーシップ ・・・・・・・11
（ミドルリーダーを中心とした体制作り、協働的な職場の風土作り）

事例２：それぞれの良さが引き出される職場風土 ・・・・・・・・・・・・・・・・・13
（様々な立場の職員（新規採用、様々な職種）が保育を語り合える職場環境作り）

事例３：行事の見直しを通して、職員間で対話を繰り返す ・・・・・・・・・・・15
（職員の共通理解を図る中で行事の見直しや対話を通して、できるところから改善）

事例４：担当保育士との関わりを中心とした保育の実践・・・・・・・・・・・・・17
（担当保育士との関わりを中心とした保育への見直しを通した実践の質の向上）

【事例１】日々の対話を大切にするための協働的なリーダーシップ

この事例のポイント

管理職と保育士の間に距離が感じられた ➡ ミドルリーダーが活躍する職場に ➡ 保育士間の対話が増え、子どもを多面的に理解するようになる

ミドルリーダーを中心とした体制を作り、対話的な関係を大切にし、協働的な職場風土をつくる取組

ミドルリーダーが中心となる打合せ

ミドルリーダーを中心とした体制作り

保育士の考えや意見を大切にしようとしていましたが、職員会議やカリキュラム会議では園長や管理職からの助言が中心となることが多く、保育士は園長らの意見を強く意識し、発言をためらうなど、戸惑うような場面も見られました。

実際に保育を進めていくのは担当の保育士であり、その保育士が、自由に考えたことを話しあえる環境を整えていくことが大切です。そのためには対話的な職場風土が大切であると考え、管理職以上の意識を改めることで、経験を重ねた保育士などのミドルリーダーが中心となり、様々な対話が生まれる職場環境を目指しました。

保育士にとって身近な存在のミドルリーダーが活躍すると、対話が生まれやすくなります。

ポイント

園長とのパイプ役になる

役割を超えて対話する

対話的な関係性をつくる

管理職よりもミドルリーダーの方が保育士にとって身近な存在です。ミドルリーダーが指示を出すのではなく、保育士から意見が出てやすくなるように、まずは保育士の話をなるべく共感的に聞くことを心がけることを大切にしました。

そのような対話的な関係性を継続的に大切にしていくと、保育士から様々な意見が出てくるだけでなく、自分たちの考えや意見を受け止めてもらえたことが自信となり、クラスを超えて活発に意見が出てくるようにもなってきました。

話を聞いてもらえると、保育士がたくさん話をするようになり、対話的な関係作りができるようになります。

ポイント

保育士同士の対話も大切にする

園長や管理職とのパイプ役となるミドルリーダー

園長や管理職は、指示命令を下すだけではなく、ミドルリーダーの話に耳を傾け、その意見を肯定的に受け止めるようにします。するとミドルリーダーも保育士に対し肯定的な接し方をするようになります。また、ミドルリーダーには保育士の話を聞くだけでなく、その話を主任や園長に相談したほうがいい内容かどうか判断するなど、園のパイプ役としての役割も任せます。すると、保育士自ら積極的に保育に関わることができるようになり、園全体で保育をする雰囲気がさらに深まっていきました。

園長もミドルリーダーも肯定的な聞き役になることで、園全体の雰囲気が変化していきます。

ポイント

協働しながら保育をする

協働的な園の雰囲気は子どもが安心できる環境になります

協働的な園の雰囲気の中で

このような雰囲気が深まってくると園全体で助け合う姿勢が生まれます。たとえば、夕方の掃除・日々の保育の場面に応じた人数調整や保育の具体的な進め方などについて、職員間で声にして協力し合い、それぞれの場面や係の担当者を中心に、みんなで相談し決めるようになりました。子どもへの対応の仕方などについて、時には意見が分かれる時もありますが、その時にはミドルリーダーを含むリーダー層が“子どもにとって最善はなにか？”という原点を大切にして仲介し、保育士自らがその原点に戻って対応できるように配慮します。

こうした環境を整えていく中で、保育士同士が互いに学びあい、子どもを理解する視点が広がっていくとともに、「自分一人ではない」「困ったときには一緒に考えてくれる」といった安心感が得られ、保育士の働きやすさにもつながっています。

対話が増えると、保育士同士が学びあったり、助けあったりする職場になっていきます。

ポイント

実践に活かすためのヒント

○気兼ねのない対話を重ねることで、保育士自身が自分で深く考えるようになります。
○ミドルリーダーは、保育を身近でみていることが多いため、保育士にとって相談・対話しやすい相手となるでしょう。
○園長やミドルリーダーが一方的に話をするのではなく、話の聞き役になる、任せて見守るなど、肯定的に接することで保育士の話しやすい環境が整っていきます。
○協働的な雰囲気の職場は、保育所全体で子どもを受け止め、理解した保育を進めやすいことから、子どもも大人も安心感が持てる場所となり、保育士の働きやすさにつながります。

【事例２】それぞれの良さが引き出される職場風土

この事例のポイント

保育士間の連携をさらによくしたい ➡ 新人が話しやすい環境作りなど対話を大切にする ➡ 働きやすい職場から子どもを丁寧に見守る環境が生まれる。

様々な立場の人が対話しやすい環境を作ることが、保育の質の向上につながります。

役職にかかわらず風通しよく

職場の雰囲気が保育の質につながる

保育の質の向上を目指すとき、保育所の課題に気づき、改善をし、園の良さをさらに向上することのできる職場環境を作ることが大切です。その職場環境作りのために、肩書きや役職にかかわらず、風通しよく、誰にでも相談しやすく、自分の意見が伝えられるような工夫を考えました。

立場が変わると思いも変わります。それを共有できる環境が大切です。

ポイント

写真などを用いると
新人も話しやすくなる

新規採用職員の声を聞く

保育所の中で一番声を上げにくいのは、園での経験が浅く、まだ信頼関係が深まっていない新規採用職員です。このような職員には、先輩保育士から積極的に声をかけたり、雑談をしたりと、話しやすい環境を日常から心がけるようにしています。また、保育の場面や子どもの姿を捉えた写真を使うことで、より具体的に話しやすくなるような工夫もしています。

新規採用職員は緊張もあり、話し出しにくいので、工夫をする必要があります。

ポイント

形式的ではなく、
ちょっとした時間を活用

ちょっとした時間に保育に関する対話を重ねる

園内研修は重要な取組である一方、まとまった時間の確保が難しかったり、参加者が多いと受け身になりやすかったりします。園内研修だけでなく、その日の保育を振り返る時間や打ち合わせの合間などの、ちょっとした時間に少人数で子どもの姿や保育に関する対話を繰り返すことを大切にしています。そうすることで、コミュニケーション量が増え、対話的な職場風土になり、職員間の理解も深まってきました。

園内研修で学んだことを元に対話をすることも大切です。

ポイント

様々な人と連携する

様々な立場の人と対話する

保育所で働いている調理員や栄養士、事務職員など、様々な職員が連携して保育にあたることを大切にしています。

給食を食べ終わったときに感想を伝えたり、子どもたちの様子を話したり、一見、当たり前と思われることを大切にすることで、園全体で保育をしている意識が強くなってきました。

みんなで一緒に子どもを育てる意識をもてるような環境を整えることが大切です。

ポイント

子どもと一緒に
保育士の誕生日を祝う

様々な工夫をして認め合う職場を目指す

何か特別なことを一つすれば職場環境が改善するというわけではなく、様々な工夫を重ねることで少しずつ雰囲気のよい職場環境へと変わっていきました。

職員同士が互いの思いや意見を肯定的に受け止める意識を普段からもつことを心がけることに加え、たとえば子どもと一緒に職員の誕生日をお祝いしたり、就業マニュアルを作成し、職員同士の働き方についての共通理解を図ったりするなど、行事や運営面の工夫も行っていきました。

できることから工夫していくことで、職場の雰囲気が変化していきます。

ポイント

職員も子どもも
肯定的に受け止められる

肯定的な子どものへの関わり

職員同士が肯定的に関わりあう職場環境を築いていくと、保育士は、子どもにも同じような関わり方をし、子どもとの対話を大切にするようになっていきます。職員それぞれの良さが引き出される環境であれば、子どもの良さも引き出されるなど、職場環境が保育にもよい影響を与えていました。

職場の雰囲気が保育によい影響を与えます。

ポイント

実践に活かすためのヒント

○様々な立場の意見を聞くことで園のよさや課題が見えてきます。
○様々な立場の人たちから意見が出やすくなるためには、ちょっとしたことでも認め合っていくなど肯定的な雰囲気作りが必要です。
○新規採用職員はなかなか意見が出しにくいので、先輩から声をかける、雑談をする、また保育の写真を使いながら子どもの話をすることで、自分から話しやすくなります。
○ちょっとした時間に職員同士で対話をすること自体が研修になり、保育の質の改善につながります。

【事例３】行事の見直しを通して、職員間で対話を繰り返す

この事例のポイント

- 行事の練習だけでは遊びが発展しない
- 練習を嫌がる子どもがいる

➡ 子ども主体の行事のあり方について職員間で語り合う

➡ 職員同士が対話的に保育を進める中で、子どもが主体的に取り組める行事となる

職員間の共通理解を図りながら行事の目的を捉えなおすと共に、子どもの意見を聞きながら行事を作り上げることを通して、子ども主体の保育について職員の対話が深まっていった事例です

大人が作る衣装と振付でのお遊戯

大人主導だった以前の運動会

以前の運動会は、９月に開催し、０～５歳児全員が参加していました。マーチングやお遊戯など、保護者が見て満足できるような種目が多く、８月の暑い中、外で毎日同じ練習を繰り返し行っていました。午前中は運動会練習の後にプール遊び、午後から室内で個別練習を行っていたため、遊ぶ時間が少なく、夏ならではの遊びがうまく発展しませんでした。また、練習が嫌になったり、うまく踊れない子は登園したくなくなるなどの課題がありました。

運動会が子どもの負担になっている、子どものための運動会になっていないなどの課題を取り上げることから、保育の見直しが始まっています。

ポイント

子どもたちが運動会に向けて話し合う

行事の見直しについて時間をかけて話し合う

園の保育方針である「自ら考え行動することのできる子ども」を育てるためには、子ども主体の保育が必要であり、『今までの運動会のやり方は、本当に子どものためになっているか』について、職員同士で話し合いました。しかし、「子どもたちは毎年一生懸命取り組んでいるから今まで通りで良い」「子どもたちが作ると内容にまとまりがなくなり、保護者からのクレームがあるのではないか」「子どもは練習を積んで保護者に観てもらうことで認められ、喜びを感じている」といった意見が出るなど、なかなか改善が進みませんでした。こういった状況の中、子どもたちも含め、改めて園の方針を踏まえて、お互いの意見や主張に耳を傾け話し合いを重ねていった結果、３年目には、運動会のための遊戯を保育士が決めて行うのではなく、普段の遊びの延長が表現できるような運動会にしようと、「子どもの練習の負担を減らす、内容は子どもたちの興味のあるものにしよう」との結論に至りました。

「保育方針を踏まえた行事に」という提案が出されてから、保育士と子どもが様々な思いを出し合いながら、時間をかけて丁寧に話し合っています。

ポイント

子どもが好きな場所を選んで体操

子どもが衣装のイメージから
振付を考えた

子どもが主体的に考え作る運動会に

体調への考慮や夏の遊びが十分にできるように、運動会の実施時期を９月から７月に変更し、参加するのは２歳児以上にしました。運動会の実施にあたっては、子どもが主体的に取り組めるよう、以下のような工夫をしました。

- 衣装を子どもたちが作ることを通して、自分の役になりきり、イメージを膨らませるとともに、振付も子ども自身が作り上げていく
- クラスごとに並んで準備体操をしていたが、思い思いに身体を動かすことを大切にするよう、見本を中央に配置し、子どもたちは好きな場所で体操ができるようにする
- 2、３歳児のプログラムは、決まった振付の体操ではなく、障害走に加えて３匹の子ブタを題材にした家（わら・木・レンガ）に逃げ込む、遊びの要素が高い種目に。練習日から本番日まで、逃げ込む家を毎回子ども自身が選び、身体を動かす楽しさが継続するようにした
- 4、５歳児が行う「バルーン」では、クラスでの話し合いで、流行っていた妖怪をテーマに、各自が好きな妖怪の衣装を作り、曲からイメージした振り付けを相談していく

運動会までの過程で、子どもが自分たちで選んだり考えたりしながら取り組む経験ができる内容に変わっています。

ポイント

子どもが考え選ぶ経験ができる種目へ

運動会・夏の遊びの充実とこれからの課題

子どもたちが毎日アイデアを出し、保育士も話し合いに入って作り上げる運動会になったことで、プールなど夏の遊びを十分に楽しむことが出来るようになりました。

しかしながらまだ課題もあります。「マーチング」は、子どもの負担とならないよう簡単な内容にしているものの、見栄えや保育士の達成感優先になっていないか、子どもにとって本当に必要なプログラムなのか、を考え続けています。また、子どもたちと一緒に準備をするため、行事準備の作業時間は短くなったが、空いた時間をどのように保育士間の話し合いの時間として有効活用していくかについても考える必要があります。

一度に改善するのではなく、できることから改善すること、改善したあとも見直していくことが大切です。

ポイント

実践に活かすためのヒント

○ 「子どものための行事とは？」「行事に向けた取組の過程も本番当日も、子どもが主体的に取り組める内容とは？」「毎年行っている種目はどのような経験につながるのだろう」といった視点で行事を見直してみることが、子どもの経験の充実や、園の理念や方針の共有・確認につながります。

○ 行事を見直す過程では、職員間での話し合いや保護者への説明を繰り返し丁寧に行うことが大切です。

【事例４】担当保育士との関わりを中心とした保育の実践

この事例のポイント

他園を見学して自園の保育に疑問をもった ➡ 改善方法を試行錯誤しながら工夫する ➡ 一人一人を大切にする保育の実践

一斉保育中心から、担当保育士との関わりを中心とした保育へと見直す中で、様々な試行錯誤をすることで保育の質や保育士の専門性を向上していった事例です。

一斉型の保育中心当時の写真

保育士同士で保育を観察する

環境を工夫する

一斉保育中心から保育を見直す

長い期間、保育士が遊びを主導するような一斉保育中心だった園を、他園の見学をきっかけに、一人一人の子どもを尊重するという視点から、担当保育士がいつも同じ子どもの側で丁寧に肯定的に関わるような保育に変えていくことにしました。

保育の見直しにあたり、全職員で他園の保育を映像にて観察することから始めました。観察を通じ、保育を行う際は、子どもの側に行き、子どもに聞こえる声で話をする、子どもの遊びの邪魔とならないように歩く、さらに保育士同士も穏やかで肯定的な会話をする等を心がけることにしました。こうした配慮の大切さを理解しつつも実践は試行錯誤の連続でした。その中で、子どもを肯定的に認めて保育しているつもりだが言葉がけが禁止語になっていると気づいたり、自分の振る舞いが丁寧でないと自分で感じたりするなどの気づきと葛藤も生まれました。

ポイント　保育を改善していく過程では、様々な試行錯誤が大切です。

保育をお互いが観察できる機会を設けて・・・

試行錯誤し、葛藤を感じる中、それぞれのクラスの保育を保育士同士が観察できる機会を設けることにしました。客観的に他のクラスの保育を見たり、ビデオで観察したりすることは、自分だけでなく誰もが悩みつつ保育を実践していることに気づく機会となりました。さらに、それをきっかけに保育士間で意識の共有化が図られ、保育士の心持ちやモチベーションが前向きになってきました。

ポイント　様々な取組をする中で保育士の心持ちなどに変化が見られてきます。

保育士主体の勉強会

保育室などの環境構成を工夫する

また、子どもが自由で主体的に遊べるように保育室などの環境構成の大幅な見直しを行いました。

保育士同士で相談し、子どもの年齢・発達に応じたおもちゃを手作りし、数や種類、置き場所や、家具の配置などの工夫を重ねていきました。

このように保育の環境構成を工夫することで、保育自体が変わっていくとともに保育士同士の会話も増え、職場の雰囲気にも変化が見られてきました。

園長などが与えた環境ではなく、保育士同士で相談し合いながら保育の環境を考えることが大切です。

ポイント

保育士だけでなく、
栄養士などとも連携

ともに学び合う喜びを感じる保育士

さらに、一人一人の保育士が意欲的に学びたいという思いから、主体的にクラス単位の勉強会を立ち上げました。

これは形式的なものではなく、毎月、クラスの同僚と共に少人数でクラスの課題や自らの悩み、子どもや保護者のことなど気軽に話し合う小さな勉強会になっています。形式的でないからこそ、安心感をもって話し合うことができ、職員間での同僚性が深まり、日々の保育の原動力になっています。

職員が主体的に互いに相談しあえる環境を整えていくことが大切です。

ポイント

一人一人を大切にする保育の実践

試行錯誤を繰り返すことで保育は変わる

保育を改善していく過程で新たな課題が生じることもあります。そのような場合、一つ一つの課題について保育士間で話し合い解決するようにしています。このような改善過程で職員間の意志の疎通と連携はさらに強くなってきていると感じます。

課題を解決していく過程で保育士の専門性も向上します。

ポイント

実践に活かすためのヒント

○他園の保育を見学したり、地域の公開保育に参加することで、自分たちの保育を振り返るきっかけが生まれます。

○保育を改善していく際は、保育士が自ら主体的に様々な事について検討し、実行して見ることが大切です。保育士にとって、こうした過程も研修の一つとなります。またこうした過程において疑問や葛藤が生じた際、園長・主任が適切に問いや視点を投げかけ、検討を深める援助を行うことも重要です。

○保育の改善により、保育の面白さを感じた保育士は意欲的に学ぶようになり、さらに専門性が向上するという好循環が生まれます。

②　記録や計画、発信物の工夫を活かす

事例５：記録の作成と対話を通して保育を振り返る・・・・・・・・・・・・・21
（記録の作成を通じて職員間で対話を繰り返し、保育の見通しを共有していく取組）

事例６：記録から丁寧に子どもの姿を読み取り、同僚や保護者と共有する・・23
（日々の記録に写真も活用し、子どもの遊びや活動の理解につなげる取組）

【事例５】記録の作成と対話を通して保育を振り返る

この事例のポイント

新園のため保育士同士で保育理念を共有するのが難しい ➡ 子どもの記録作成と毎日の対話を通して保育を振り返り、次につなげる ➡ 子どもの育ちや保育理念を職員や保護者と共有できるように

保育士同士の対話や、また個々に記録を作成することを通して子どもの姿を読み取り、育ちへの理解を深めると共に、保育を振り返り、次につなげていく事例です。

その日の保育についての話し合いを、その場で日誌として記録に残します

新園としての課題～私たちの保育を考えたい～

新園として開園しましたが、全く異なる理念の保育園で働いてきた職員、幼稚園で経験してきた職員、新卒の職員など、異なる経験や考えの職員が集まっていることから、保育の理念を職員同士が共通理解しながら進めていくことに、難しさがありました。１人の子どもの育ちを支えるという視点に立ち、園の職員が同じ方向を向くために、園の保育理念を伝えながら、記録と対話を重視した取組を行いました。

園の職員が同じ方向を向くことができるよう、子どもの姿や園の理念を共有する工夫をしようと取り組んでいます。

ポイント

月に１回、クラスの子どもの活動や経験を話し合いながら書き起こします

毎日の記録と対話を積み重ね、翌日・翌月の保育へ

〇毎日の記録と対話

- ０・１・２歳児クラスでは担任同士が集まり、その日の出来事、子どもの様子などを振り返って話し合います。対話の内容を箇条書きにし、そのまま日誌として残しています。
- その日の姿を出し合った後、「今日がこのような姿だったから、明日はこんな環境を用意してみてはどうか？」「今日はこんな反省点が残ったから、明日はこういう方法で対応しよう」と翌日の姿を予想し、環境を考え、その対話の結果を、日誌の「予想される明日の姿」「環境・配慮」の欄に記入します。

〇毎日の記録を踏まえた月１回の打ち合わせから、翌月の保育の環境・配慮の記入へ

- 月１回、日誌やその他の記録をもとに、その月の子どもの活動・遊び・興味関心に関わるキーワードを、担任間で対話しながら書き起こしていきます。出されたキーワード同士を、担任保育士の願いや、五感、自然・社会・生活など様々な視点から図示してつないでいく中で、今後の保育の展開を予想し、必要な環境構成・配慮を書き起こしていきます。
- 月１回の育ちの振り返りを通し子どもの姿・経験を確認し、全体的な計画で発達の確認と保育の見通しをもつようにします。

話し合った子どもの経験を視覚化し、次の月の環境構成や配慮につなげます

保育士が子ども一人一人をよく知ろうという取組が、結果的に職員間の対話を促しています。

ポイント

子どもの育ちの記録。左が０・１・２歳児の個別の記録、右が３・４・５歳児のクラスの記録

写真と文章による子どもの育ちの記録は掲示前に園長と確認。子どもの姿をもとに理念を共有する時間にもなります

記録を通して対話し、振り返ることの意味

- ０・１・２歳児クラスでは月に１回、日々の記録（日誌）をもとに、クラスの育ちの振り返りを行う他に、写真と文字を使った「個人の育ちの記録」を担当が作成しています。日々の記録（日誌）を踏まえて「子ども（個人）の育ちの記録」を作ることは、保育士一人一人が子どもや保育を振り返ることにつながっています。　※幼児クラスでは、午睡時に担任間で、写真をもとに話し合って「クラスの子どもの記録」を毎日作成しています。
- 「個人の育ちの記録」では、日々の記録と撮影した写真を見ながら、その場面を思い出し、子どもが何をしていたか、あるいは何を思っていたか、何を意図していたのかなどの内面を探ります。さらに、その場面だけではない、「家庭の状況」「前後のその子の姿」「他の職員が見ていた情報」なども織り交ぜることで、場面で見えたことの中に何が含まれているのかを探ることができます。そこで考えたことを次の保育に生かしています。
- 作成した「個人の育ちの記録」は園内に掲示します。掲示する前には、記録をもとに担任間や、主任・園長と語り合う場を設け、そこでの語り合いの中で、互いの考えを伝えあったり、園の理念とのすり合わせを行ったりしています。
- 「個人の育ちの記録」を掲示することで、保護者が子どものもつ力や園の保育で大切にしていることに目を向けてくれるようになるとともに、積極的に保育に参加する保護者も増えてきました。

記録作成に関する課題

多くの保育士は楽しみやこだわりをもって記録をしている一方で、記録作成に時間がかかることが課題となっています。記録作成のための時間の確保が、休憩時間のとりづらさや勤務時間内に記録の作成が終わらないことにつながることがあり、記録作成を通した保育の質の向上と、保育士の負担への配慮とのバランスをどうとるかが、園としての課題です。

ポイント

記録作成の過程で担任間や主任・園長と語り合うことが、理念を共有する時間にもなるとともに、職員と保護者との対話にもつながっています。

実践に生かすためのヒント

○子どもの表情や動き、周囲の環境等を具体的に伝えるような写真に加え、保育士が読み取った子どもの経験・成長のプロセスを文章で書くことや、それについて同僚と話し合うことで、子どもの理解につながる様々な視点をもつことができるようになるでしょう。

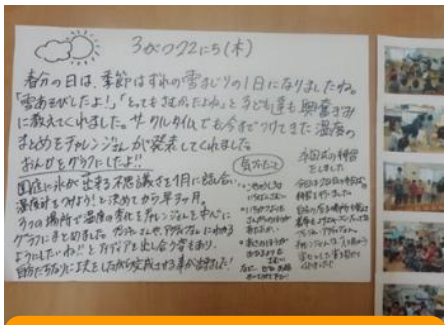
○たくさんの文章を書くことは難しいと感じる場合は、写真に添えてひと言（２～３ 行）子どもの経験を書いてみるというところから始めてもいいでしょう。

【事例６】記録から丁寧に子どもの姿を読み取り、同僚や保護者と共有する

この事例のポイント

毎日の活動記録を掲示していたが、保護者の反応は少なかった ➡ 写真を用いたエピソード記録の掲示に変えた ➡ 保護者との対話が豊かになり始めた

日々の記録に写真も活用し、子どもの遊びや活動の理解につなげる取組



毎日の子どもの姿や活動をボードに掲示

毎日の活動を掲示物で保護者に発信

保護者への発信を大事にしたいと、今日あった活動の様子をボードに毎日、掲示していました。その内容の多くは、どのような遊びをしたかなどの活動の報告が中心でした。

掲示物の内容は文章を中心に作成。写真を横に添えて掲示することもありましたが、クラスの子ども全員が写っていることを意識したものでした。掲示した内容について、保護者から尋ねられることはあまりなく、日々の子どもの姿から保育士が感じていることをうまく伝えられているのか、手ごたえを感じられずにいました。

活字や文章が中心だと、なかなか読んでもらいにくいものです。

ポイント

研修の学びを活かして記録を充実させる

外部研修で写真による記録のポイントを学ぶ

一人の職員が、外部の研修で、写真を使ってそこから子どもの姿を読み取る研修を受けました。それは、これまでの写真を文章に添えるものして取り扱うものとは異なり、写真から子どもの姿や経験内容を読み取り、記録するというものでした。単なる子どもの活動ではなく、子どもがわくわくと夢中になっている姿を記録するとともに、そこにある子どもの経験の大切さや意味を書くことに保育の記録としての手ごたえを感じました。早速、保護者への発信に活用し始めることにしました。

「何を」記録していくのかが明確になることで文章や写真による伝え方も変わっていきます。

ポイント

記録の充実により対話が生まれる

保護者からの手ごたえ

幼児クラスで園庭や散歩先で集めた木の実や花びらで色水を作るブームが起こり、連日子どもたちが夢中になっている姿を写真に撮って掲示したところ、家で栽培しているハーブを持ってきて下さったり、「黒豆の煮汁を使いますか？」と訊ねて下さる保護者が出てきました。保護者に「あのね、葉っぱの色と出来た色水の色は違うんだよ」と記録を掲示している前で一生懸命語る子どもの姿に、保育士も言葉を添えて三者でその日を共有する場面が増えました。

子どもの遊びの盛り上がりの発信は反応が大きいようです。

ポイント

記録の作成を通じて保育の振り返りが充実

職員への広がりと課題

こうした記録の作成や発信が、一人の職員の取組から、園全体の取組へと広がっていきました。写真を活用した、子どもの魅力的な姿を発信する記録を通して、保護者との対話が活発になり、職員一人一人が記録を楽しみながら作成している様子です。

現在は、日々の記録だけで終わっているので、今後、１か月続いた遊びなどを１つの流れとしてまとめるような記録も作成したいと考えています。また、こうした記録の作成や職員間での共有を通じて得られた保育の見通しを、指導計画にもつなげていきたいと考えています。

職員自身が楽しいと感じながら、主体的に取り組むことが大切です。

ポイント

実践に活かすためのヒント

○写真を活用した記録は、保護者への発信のためだけではなく、保育士自身が子どもの学びを読み取るツールや、子ども、同僚との対話にも生かされます。

○保護者に子どもの姿や保育を伝える場合、写真などの視覚的な記録をうまく活用することで、文章だけの記録よりも、より伝わりやすくなります。

○単に写真を用いるということだけではなく、子どもが遊びに熱中している姿や、そこでの子どもの経験内容を読み取り、記録していくことが重要です。

③　園内外の研修を活かす

事例７：事例や写真などを用いた保育の質の向上につながる園内研修・・・・・27
（写真や事例を活用して職員間の意見交換を促進し、園内研修を実践につなげる）

事例８：公開保育や研修での学びを踏まえた園内研修と保育の見直し・・・・・29
（自治体主催の公開保育や研修から学んだことを、保育の改善に活かした取組）

事例９：外部研修での学びを園内研修に取り入れ、保育環境の改善に活かす・・31
（外部研修で学んだ研修方法を園内で実践し、計画や保育環境の充実につなげる）

事例 10：公開保育を通して次の保育につながる新たな気づきや発見を得る・・33
（近隣の２、３園と行う身近な公開保育を自園の保育実践の質向上につなげる工夫）

【事例７】事例や写真などを用いた保育の質の向上につながる園内研修

この事例のポイント

園内研修を中堅職員が企画 ➡ 事例や写真を使った具体的な園内研修を実施 ➡ 研修内容が具体的になり、積極的な対話が増える。実践につながる工夫もする

ただ話を聞くだけでなく、積極的に意見の交換を行い、研修がその後の実践とつながるために、事例や写真を使い、研修方法も工夫した事例です。

園内研修を中堅保育士が企画する

園内研修のねらい

園内研修の目的は、職員が学びを共有、共感し、学んだ内容をもとに安心して保育を実践することができる素地を園内に作ることだと考えています。

共通のテーマを基に一緒に考える仲間の存在があるからこそ、自己発揮をしやすく「研修で話題になったあれね」「私も考えていた」と対話的な環境となっていきます。園内研修をきっかけに一人一人の資質を高め、チームワークを作り、園全体の保育の質を高めることもねらいの一つとしています。

メンバー一人一人が、目的意識を持って主体的に参加できる園内研修を実施することが大事です。

ポイント

写真を活用した園内研修

中堅職員が中心となって園内研修を計画する

与えられた研修ではなく、自分たちで学びをつくり出していく意識を高めるため、園内研修の内容は、全職員からテーマを募り中堅職員が中心となって企画を立てます。

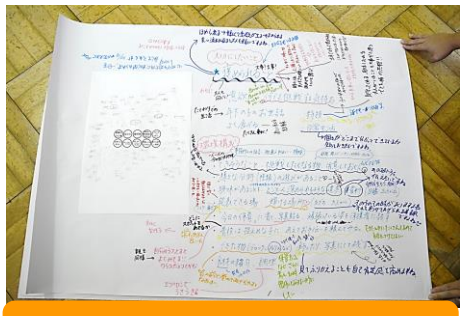
企画立案においては、内容に応じたタイムテーブルや進め方もあわせて検討します。この話し合い自体も保育の本質を考え園の現状を把握する時間であり、園内研修の一環となっています。

その話し合いから、参加者が主体的に参加できるように、具体的に理解できるような写真を使った事例発表を中心に園内研修を企画したことがありました。

受け身の研修ではなく、主体的な参加ができる研修にすることで、研修の目的やテーマがより明確になります。

ポイント

事例をもとにしたグループ討議



グループで作成した模造紙の記録

園内研修後も振り返りをする

研修を通して遊びの環境を工夫する

写真や事例を用いた園内研修

スライドの中で写真を用い、子どもたちの様子や遊びのプロセスを中心にした事例発表を全体で行った後、様々な意見を出しやすいように４～６人の小グループに分かれて話し合いをしながら、出された意見や気づきなどを関連する内容ごとにまとめる形で模造紙に記録していきました。

話し合いでは、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を活用して事例を振り返り、そこから見えてきた子どもの姿や保育士が工夫していたポイントなどを踏まえた上で、遊びがさらに深まる環境構成について検討しました。

①中堅職員が中心となって企画し、②身近な保育実践をテーマに取り上げ、③写真などを用いて具体化したことで活発に意見の出し合える研修になりました。

身近な事例を写真などで「見える化」することで話し合いも活発になります。

ポイント

学び続けるきっかけになる園内研修

研修時に作成した模造紙の記録を、会議室の廊下に掲示することで、そこを通る時に保育士が確認をしたり、保育士間で意見を交換できるようになっていきました。また、保育士はそこからヒントを得て、保育実践につなげて行く取組が見られるようになりました。園内研修をすれば終わりではなく、その後の振り返りができるように工夫することで研修の効果がより深まります。

研修の効果が実践に役立てるような工夫が鍵になります。

ポイント

実践に活かすためのヒント

○全職員が提案でき、中堅職員を中心に企画したからこそ、保育士は園内研修に主体的に参加できるようになりました。
○自園の事例を用いた研修だからこそ、分かりやすく、対話もより具体的になります。
○写真を用いることで自園の保育を客観視しやすくなり、新たな発見も見つかりやすくなります。
○研修内容を模造紙などで「見える化」すると、園内研修の時間だけでなく、その後も学びが続き、研修の成果を保育に反映させやすくなります。
○研修後もちょっとした時間に振り返りを行うように、少しの時間でも数人で話したり、考えたりすることも研修の一環となります。

【事例８】公開保育や研修での学びを踏まえた園内研修と保育の見直し

この事例のポイント

一斉保育中心から子ども主体の保育にしたいと考えた → 他園の公開保育での学びを、園で話し合い、保育に生かす → 保育を変えた後、自園でも公開保育を行い、保育のあり方を確認

自治体の公開保育や研修から学び、できることから園の保育や環境に取り入れ、子どもの姿を踏まえて改善を繰り返しながら、子ども主体の保育を目指していった事例

保育士主導での保育中心だった

他園の保育を見て、子ども主体の保育を目指す

以前は、保育士の指示通りに活動し、行事をこなしていくのが教育で大切だと考えていたため、午前中に製作や体操などの活動を、保育士主導の下、全員で一斉に行う保育を行っていました。

そうした保育を見直すきっかけになったのは、第三者評価の評価者として、園長自身がある園を訪問したことでした。訪問した園では、子どもが部屋で走り回ることもなく、とても落ち着いて遊びに集中していました。給食中は作りかけの大型積み木が保育室にそのまま置いてあり、食べ終わった子どもから続きを始めていました。保育士が大きな声で指導している姿もなく、語りかけるような口調でした。何が自園と違うのかと思って質問してみると、子どもの主体性を尊重することを大切に保育の実践をしているためだと分かりました。

ポイント　他園の保育と自園の保育の違いに気づくことがきっかけとなっています。

公開保育に参加、環境や保育方法を学ぶ

自治体の研修（公開保育）で保育を具体的に学ぶ

園のあるM市では、２年前から公立民間の垣根を越え子ども主体の保育の実践に取り組んでおり、公開保育や講演会などの研修を行っています。自園でも落ち着いた環境で子ども主体の保育が出来ないかと模索し始めた頃、公開保育に参加する機会がありました。子ども自身がおもちゃを棚から選んで出して遊び、終わったら自分で片付ける様子や、保育士が大きな声を出さず子どものそばに行って話す様子、ままごとコーナーや手作りおもちゃなどで活き活きと遊ぶ様子など、実際に保育を見ることで「子どもの動き」「保育士の動き」「保育の環境構成」がよく分かり、自園での保育にどのように生かしていくかを考える機会となりました。午後は、公開園のクラス担任が子どもの動きや保育士の意図について説明を行い、講師による講評もあり、学びが多い研修となりました。

ポイント　公開保育に行き、環境構成や保育士の関わりなどについて具体的に学んだことが、自園の保育の見直す際の参考になっています。

公開保育後のカンファレンス

園内研修で環境・保育の流れを見直す

公開保育参加後は、環境構成の見直しをテーマに園内研修を行い、保育の改善の取組を始めました。最初に保育室の環境、具体的には子どもが登園後すぐに遊べるコーナーの設置、発達に応じたおもちゃを用意しました。また、子どもの遊びが途切れないように、以前行っていた 10 時からの集まりや全員が集合して行う体操や製作活動をやめ、全員が登園し終わった頃に、その日の流れを保育士から説明し、子ども自身がしたい遊びを決めたり、昨日からの遊びの続きができるような環境を整えていきました。

園内研修で環境の見直しを取りあげ、公開保育を参考に、できることから見直しを始めています。

ポイント

自園でも公開保育を行った

話し合いと参観を繰り返して、保育士と保護者が変化

当初、保育士からは「我慢できない子に育つ」「保育士がどこまで援助すればいいか分からない」、保護者からは「しつけやけじめを付けて欲しいのに残念」「毎日好きなことばかりやって小学校に行ったとき心配」など疑問や懸念の声が多く出ました。しかし、取組や話し合いを続ける中で、子どもが意欲的に遊ぶ姿が多くみられるようになることで、保育士の見方が変わっていきました。また、参観日を繰り返し設け、子どもたちが遊びに没頭する姿、いきいき遊ぶ姿を保護者に見てもらうような工夫を行い保育士も保護者も子どもたちの発想や表現を理解してくれるようになっていきました。

環境を変えることで生まれる実際の子どもの姿を見ることが、保育士や保護者の考え方の変化につながっています。

ポイント

現在の保育
（自分たちで考えたショーを他クラスの子どもにみてもらった場面）

自園を公開して保育のあり方を確認

その後、園で公開保育を行うことになりました。当日はダイナミックな発想の共同作品やごっこ遊びをみていただきました。それまで子どもの主体性を尊重する保育が出来ているか不安であった保育士たちに、子どもたちの生き生きとした姿を見せることができ、参加者から励ましの言葉をいただきました。

環境を見直した後に、公開保育を行ったことで、環境や保育の仕方を変えたことの意味を確認できています。

ポイント

実践に活かすためのヒント

○公開保育や研修会などで、よいと思う環境や保育に出会った際、もし自園で取り入れるとしたら、どのようにしたら取り入れられるだろうか・どのようなことなら取り入れるだろうかなどと考え、できそうなことから取り組んでみることが大切です。

【事例９】外部研修での学びを園内研修に取り入れ、保育環境の改善に活かす

この事例のポイント

計画どおりの活動中心の保育だった → 外部研修で学んだ研修方法を園内研修に取り入れる → 子どもの主体的な遊び中心の環境構成へと変わった

外部研修で学んだ職員の報告を園内の研修に活かし、子どもがより主体的に遊ぶように変化した取組

子どもの主体性の尊重を目指していたが、実際は計画優先の保育を行っていた

これまで、子どもの主体的な遊びを大切にしたいと考え、遊びのコーナーを作るなど環境の工夫も行ってきました。しかし、実際はコーナーの遊びに終始し、月や週の計画どおりに保育士が提供する活動を進めることが中心となっていました。本当に自分たちの保育はこれでよいのかと悩むことも多くありましたが、なかなかその改善の手立てや方法は見つかりませんでした。

子ども主体の保育への見直しは、どこの園でも難しいものです。 ポイント

もの置き場になっていた園庭の一角

キャリアアップ研修での職員の学び

ある時、自治体のキャリアアップ研修に参加した職員が研修で学んだ、子ども主体の保育を実現するための様々なノウハウを、園で実践したいと話しました。具体的には、子どもの姿に応じた環境の見直しや、子どもの写真を通してそこから子どもの心情や育ちを読み取る研修方法、子どもの姿を踏まえた指導計画の作り方などです。園長は、一人の職員のクラスから始めた取組を園全体にも取り入れたいと考えました。

外部研修には園内に活かせる資源がたくさんあります。 ポイント

環境の改善が遊びの充実につながる

環境の見直し

まずは、園全体の環境の見直しを行うことにしました。例えば、物置になっていて立ち入り禁止になっているテラスは子どもが使えるようにできないかとの意見があり、子どもが遊べる環境に整備しました。

すると、その場でお店屋さんごっこが始まるなど、子どもの遊びが豊かになり、また、異年齢の遊びの交流の場ともなったため、多くの職員が、環境を少し変えるだけで、遊びがこれほどまで豊かに発展することの手ごたえを得ることができたのです。

まずは、環境の小さな見直しから行っていくことが大切です。 ポイント

子どもの気持ちに思いをめぐらせ語り合う

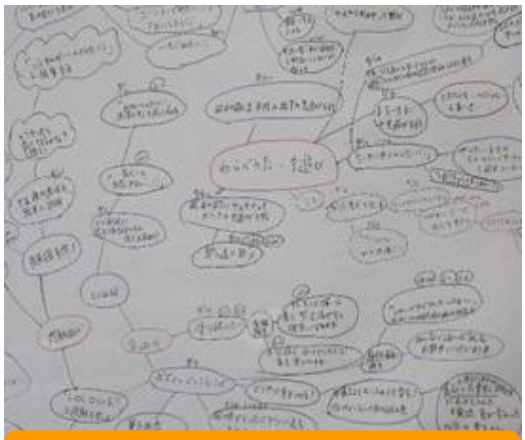
園内で子どもの姿の話し合いへ

今度は、キャリアップ研修で学んだ方法を取り入れ、園庭を変えたことで生まれた遊びの写真を用いて話しあうなどの園内研修を行うことにしました。

研修では、あえてクラスをシャッフルして話し合うことで、普段あまり話したことのない職員同士の交流にもなりました。また、グループ発表をしながら他の職員の考えを聞くことによる気づきがあり、子どもの気持ちを考える視点が、より広がっていきました。そして、何よりも子どものことを話したいと思う雰囲気が広がっていったのです。

子どもの姿を話すことが楽しいと感じる園内研修が重要です。

ポイント



子どもの姿を図式化して次を予測する

子どもの姿から作っていく計画の模索へ

多くの職員は、子どもが主体的に遊びを展開する姿に手ごたえを感じ始め、さらに研修で学んだ、子どもの姿をキーワードで捉え、図式化してつなげることで次の子どもの活動の展開を予測する方法も実践してみました。そうした取組の中で、子どもの姿を語り合ったり、次の展開を予想して、今度はこのようなモノを出してみたらもっと遊びが豊かになるではないかといった、職員同士が学び合う姿が園内で当たり前に見られるようになってきました。

子どもの姿を踏まえて計画を日々再構成していくことが大切です。

ポイント

実践に活かすためのヒント

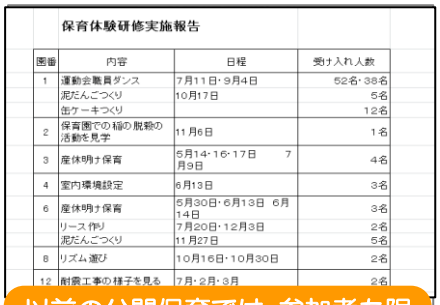
○外部研修で学んできた内容を、各園の状況に合わせ、園内研修に取り入れることが有効です。
○子どもの主体性を尊重する保育を実現していくための工夫につながるよう、外部研修を活用していくことが大切です。
○経験の浅い職員も気軽に話し合えるよう、写真を用いるなどの工夫をしながら研修を行うことが重要です。
○環境を具体的に変えてみて、そこでの子どもの姿について園内で語り合うことは、保育士の手ごたえにつながります。

【事例 10】公開保育を通して次の保育につながる新たな気づきや発見を得る

この事例のポイント

公開保育に課題・難しさや抵抗感があった ➡ 近隣の２,３園で公開保育を実施し、参加者が増えた ➡ 見てもらう側・見る側共に、共通の視点で継続的に学びあえるように

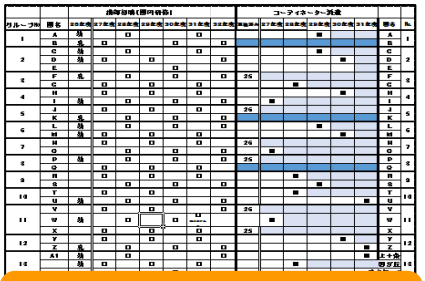
近隣の保育園同士が 2,3 園一組となり、年度ごとに交代で公開保育を行い、質の向上に向けて継続的に取り組んだ事例。



保育体験研修実施報告

園番	内容	日程	受け入れ人数
1	運動会職員ダンス	7月11日・9月4日	52名・38名
	泥だんごつくり	10月17日	5名
	缶ケーキつくり		12名
2	保育園での稲の脱穀の活動を見学	11月6日	1名
3	産休明け保育	5月14・16・17日　7月9日	4名
4	室内環境設定	6月13日	3名
6	産休明け保育	5月30日・6月13日　6月14日	3名
	リース作り	7月20日・12月3日	2名
	泥だんごつくり	11月27日	5名
8	リズム遊び	10月16日・10月30日	2名
12	耐震工事の様子を見る	7月・2月・3月	2名

以前の公開保育では、参加者も限られ、多様な意見をもらうことも難しかった



２・３園で実施する公開保育の計画表

午前中公開保育を行い、午後はカンファレンスで話し合いを実施

公開保育の難しさ・抵抗感から、学びやすい公開保育へ

- 以前より、保育の質向上に向けて各園で様々な取組が行われていました。そうした中で、園長会で、各園の特徴を生かした園内研修を学べる機会を設けようということになり他園を見学する研修が始まりました。
- しかし、感想や意見をもらう場や話し合いの機会がないことから学びが深まりにくく、公開する側のメリットが課題でした。

→ 公開保育後にカンファレンスを行い、話し合いの機会を設けることにしました。

⬇

- 園外の人から感想や意見をもらうことに慣れておらず、公開しますという手がなかなか上がりませんでした。また、園同士が地理的に遠いと参加人数も限られ、多様な意見をもらうことが難しい状況でした。

→ 職員が参加しやすいよう移動時間の少ない近隣園２,３園のグループで公開保育を行うようにしました。

公開保育を実施する上での難しさなどを、一つずつ解決していくための工夫をしていくことが重要です。

ポイント

2,3園で公開保育を実施するための方法と工夫

- 公開保育当日の午前中は、保育を見学してもらう。
- 午後は見学した保育を踏まえたカンファレンスを行い、参加者や助言者から感想や意見をもらう。
- 午後のカンファレンスのみでも参加できるようにする。
- 午後から参加した人にも公開保育の様子が分かるよう「見える化(会議録を速やかに出す・保育士室に貼りだす・写真・ビデオを活用する)」の工夫を行う。

公開保育を写真等で可視化するなど、よりたくさんの人が学ぶことができるような工夫がされています。

ポイント

保育を公開することで自園の保育を振り返り、他園を見ることで新たな気づきを得る

① ２・３園で実施することのよさと、実施の上での工夫

・ 近隣の２,３園で実施するので共通の視点が持ちやすく、経過や前年度の様子・互いの背景を共有でき継続的に各園の課題を深めていくことができる場となっている。

・ 近隣園なので保育の背景を知った上で自園の保育にどう生かすかを考えることができる。一般論でなく「今日のこの子どもの行動」について皆で話し合うと、具体的な保育の方法が出てくる。

② 自園の保育を見てもらうことについて

・ 自園の保育を客観的に見てもらい実際の保育の場面について語りあうことで、具体的に保育に生かせる意見をもらえる。自園の中だけでは当たり前になっていることも、他園の保育士や助言者から聴くことで改めて確認できる。また、園外の人に認めてもらうことで自信につながる。

・ 公開する際に、より子どもの経験を豊かにする環境を工夫しようとする努力を自然と行うことにつながり、現在の子どもの姿をより深く観察する目が自然に養える。

③ 他園の保育を見ることについて

・ 様々な環境や保育の方法を知ることができ、自園の保育に生かすことができる。

・ 園内研修の様々なアイデアを得られることもある。（例：環境図に子どもの遊びの状況を記入するマップ型の記録で、子どもの経験を保障し「やりたい遊び」につなげることを学んだ。）

④ 公開保育の課題

さらに多くの職員が参加できるための工夫、時間の確保が必要。また、カンファレンスに参加できなくても公開保育や協議会の内容が分かる可視化の工夫をしていく。互いに保育を認め合う雰囲気づくりのために良いところを見つける等意見交換のルール作りをし、より参加への意欲につなげたい。

保育を公開することで、次の保育につながるヒントをもらえるなど、意識を向上させることにつながっています。

ポイント

公開保育の学びを持ち帰り、園内で話しあって保育環境を改善した

公開保育の学びを園での話し合いと実践につなげる

- 園庭に固定遊具や砂場などがなく、乳児がじっくり遊びこむためにどうしたらよいか考えていました。
- 他園の公開保育で狭い園庭でも可動遊具を多く取り入れ工夫する保育が大きな学びとなりました。園内研修で話し合い、自園でも可動遊具の種類を増やす、新たな砂場を作るなど工夫をしました。
- 子ども達の遊びが大きく変わり、乳児がじっくりと遊び込む姿がみられるようになってきました。

公開保育で持ち帰った学びを、具体的に園で生かすための話し合いを園内研修で行い、環境構成に生かしています。

ポイント

実践に生かすためのヒント

〇公開保育というと、講師を呼んだりいろんな園の人が来たりと少しハードルが高い場合もあるかと思います。近隣の園に声をかけて来てもらう、２～３園と保育を見合い話し合うなど、できそうなことから取り組んでみるとよいでしょう。

〇話し合いの際には、「参加者全員が話す」「疑問点を話す際には、批判するのではなくまずは質問する」といったルールを設けてみるなど、話し合いがしやすくなる方法を工夫してみましょう。

④　環境構成の工夫を活かす

事例 11：子どもの主体性を尊重する保育を目指し、環境構成を工夫する・・・37
（子どもが自ら関わる遊びの空間へと改善していく過程で、保育士の視点も
変化していった取組）

事例 12：目的やイメージを共有する園庭づくり・・・・・・・・・・・・・・・39
（園庭環境を改善する過程で、保護者も参画しはじめ、保育が充実していった取組）

【事例 11】子どもの主体性を尊重する保育を目指し、環境構成を工夫する

この事例のポイント

子どもが保育室を走り回ったり、遊びを選べなかったりした ➡ 動線や玩具などの環境構成を見直し、改善を繰り返した ➡ 子どもが落ち着いてじっくりと遊ぶことができるようになった

物や場所を選ぶことや継続して遊ぶことができる環境を考え、子どもの姿を踏まえて工夫を繰り返すことで、保育士の関わりも変わっていった事例

子どもたちは遊びを選べなかった

保育士主導の保育・落ち着きに課題のある保育室

以前は、保育室は出来るだけ広く使えた方がいいとして、普段は机やイスを壁際に重ねて置いていたため、走り回る子がいました。自分で選べる遊びはなく、おもちゃは保育士が決めたものを押し入れから出してもらい遊んでいました（粘土・ブロック・ままごとに使う食べ物や材料など）。３・４・５歳児は行事と行事の間の練習のない時間に遊ぶなど、保育士が指導する一斉保育が教育・学びの時間で、子どもが自発的に遊んでいいのは自由時間という感覚でした。

子どもの主体性を尊重する保育を目指す中で、他園の公開保育で学んだことを踏まえ、職員間で保育の環境について検討を始めました。

主体的な保育を目指して、まずは職員間で環境の見直しからはじめています。できそうなことから話していくことが大事です。

ポイント

動線を考えてコーナーを作った

遊びの選択や継続を考えた物や空間の設定

子どもの遊びの実態や他園の保育環境で参考にできそうなことを園内研修で話し合ったり、外部研修に行った際に講師に質問したりしながら、以下のように環境構成の見直しを行いました。

- 遊戯場や外で体を動かすように促すと共に、保育室では落ち着いて遊びに没頭できるようなコーナーを作る。
- 子どもの動線に気をつけてコーナーを配置する。朝部屋に入ってきて、ロッカーへ服やカバンを置いたりするのに、遊びの空間を横切らないようにする。
- 机上遊び（ジグソーパズルやトランプ等）、ごっこ遊び、積み木など年齢や発達に応じた遊びの種類や配置を検討する。
- 一度決めたおもちゃなどの配置も子どもたちの遊びの様子に合わせて、再検討する。
- 登園後から自由に遊べるように、机上遊びやままごとを用意しておく。積み木は途中で離れても続きが行えるように、そのまま置いておける場所で遊べるように設定した。

子ども自身が遊びを選べるようにした

すぐに変えられる部分から取り組んでいます。環境を変えた後も、子どもの様子を見ながら試行錯誤を繰り返しています。

ポイント

子どもの発達を踏まえた玩具を揃える

変更後出てきた課題からさらなる改善へ

保育環境を見直した後、子どもが主体的に遊ぶようになってきましたが、片付け方法やスペース確保などについて課題も出てきました。

- 保育室が狭く、給食を保育室で食べるため、共同で制作物が大きくなってくると必ず片付けないと行けない場所が出てくる。部屋の中が製作で盛り上がってくると、昼食用のスペースが無くなってしまう。
- 延長保育の部屋が保育室のため、朝の受け入れ、夕方のお迎えの時、乳児の手の届く位置におもちゃの棚が設置してあるため、せっかくのコーナーに置いてあるおもちゃが毎日バラバラになってしまう。
- 昼食に移るとき、片付けを促す声をかけるタイミングが難しい。遊びに没頭している子どもたちがいると、どちらを優先して良いのか、悩んでしまう。

そこで、改めて話し合いを行い、子ども全員に向けて、大きな声で片付けを促すのではなく、「〇〇くん□□を××へ持って行ってくれる？」と個別に伝えていくことに決めました。

環境を見直す中ででてきた課題について、環境だけでなく、子どもへの関わり方を見直しています。

ポイント

遊びが継続できるような環境にした

遊びの発展と子どもの落ち着き、保育しの視点の変化

年齢ごとの発達に応じたおもちゃや棚の配置の工夫などで、遊びに対する集中力が増しました。例えば、ままごとも母親の真似から始まり役割を決めたごっこ遊びに発展するなど、好きなおもちゃを選んで遊べることで、子どもたちの心に落ち着きが生まれてきました。また、支援が必要な子どもについても、その子なりの発達に応じた遊びを選べるようになり、周りの子と比べて早いとか遅いといった見方をしなくなりました。

ただ毎年同じ年齢でも興味・関心は全く違うため、保育士がクラスの子どもたちの「今」を理解しながら保育を展開していくことが重要だと感じています。

環境を変えたことで落ち着いて遊ぶことができるようになっています。保育士の子どもの見方も変わってきています。

ポイント

実践に活かすためのヒント

〇子どもが環境と関わる様子を踏まえ、保育の環境を見直し、安心して過ごせると共にこれをやりたいと思えるように保育の環境を構成したり、関わり方を見直してみたりすることが大切です。

〇子どもの姿を見ながら、保育士同士で話し合い、工夫や試行錯誤を繰り返し、見直しを積み重ねていくことが大切です。

【事例 12】目的やイメージを共有する園庭づくり

この事例のポイント

園庭環境を充実させたい ➡ 職員間でイメージを共有、さらに保護者も巻き込む ➡ 主体的に遊ぶ子どもたちの姿を保護者とともに喜ぶ

主体的な遊びが広がる園庭にするために、職員と保護者が協働して改善をしていきました

取り組む以前の園庭環境

主体的な遊びが広がる園庭にするために

子どもが使いたいときに使える、挑戦したいときに挑戦できる、ホッと安心できるような環境を保障していきたい。このような思いはありましたが、園庭は遊具の出し入れを職員がするなど、大人が用意した環境で遊ぶような状況にありました。そのためか、保育士に依存する、むやみやたらと走り回る、生活の切り替えが難しい、怪我が多いなどの様子が多く見られていました。

思いを実現するために、現状を把握しましょう。

ポイント

職員間のワークショップの様子

園庭を改善するために

状況を改善するために、まず職員間で理想の園庭のイメージを繰り返し話し合いました。

しかし、話し合いだけでは具体的になりにくいため、ワークショップ的に実際に作業をしながら考えることにしました。「自らが作る」ことの楽しさと、作ったものを子どもが喜んで遊び始める姿を見て、保育士に限らず他の職員も含み、さらに積極的に改善に取り組むようになりました。

実際に動くことで、具体的にイメージできるようになっています。

ポイント

父母の会会長が保護者に説明する

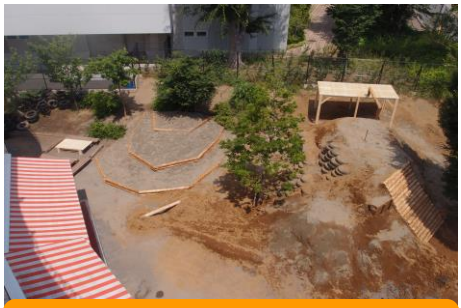
保護者の理解を得る

園庭環境の大きな変化を保護者に理解してもらうために、父母の会会長にも説明会で説明してもらいました。父母の会は普段より「職員も保護者もみんなで保育環境を作る」ことに理解を示していたので説明することにも理解を示してくれたのです。

保護者の理解を得ることで、保育はさらに充実します。

ポイント

保護者と協働し、園庭を創る



変化していく園庭

環境を工夫して遊ぶ子どもたち

保護者とともに園庭を改善する

これを機会に、保護者も一緒になって園庭作りをする企画が立ち上がりました。希望した保護者と職員が一緒になって、平らな園庭に 100 ㎥を超す山砂を搬入し、その山砂を凸凹にし、そこに大型遊具（築山、砂場、丸太階段、ステージ）を設置しました。

丸一日の作業に保護者も保育士もなく汗を流したひと時は、コミュニケーションのひと時にもなりました。

保護者が「明日からここで子どもが遊ぶんですよね」と明日からの子どもの姿を思い浮かべながら作業をしているのが印象的でした。

ともに作業をすることで、保護者は保育園や子どもにさらに興味や関心をもつことができます。

ポイント

園庭改善後の子どもたちの姿

築山を作るなど、園庭を改善した結果、子どもが主体的に遊ぶことができるようになり、保育士が適切な距離で見守りながら、子どもの小さな願いを子ども自身で実現することのできる姿が多く見られる環境となってきました。

また、遊具の出し入れも少なくなるよう工夫したことで、遊びの続きが次の日もできるなど遊び込めるようにもなってきました。

また園庭を保護者と共に作ることにより、子ども観を共有しやすくなったり、職員と保護者で子どもを語る風土づくりのきっかけにもなりました。

環境を工夫することで子どもの遊びは豊かになります。

ポイント

実践に活かすためのヒント

○子どもの姿から、疑問に思ったことを改善するためには職員間の連携が大切です。

○改善を円滑に進めるためには保護者の理解、協力が欠かせません。事例では父母の会の会長が説明するようにしています。また改善を通して保護者と子ども観の共有や一緒に子どもを語る風土作りにつながります。

○園庭に高低差を作ったり、遊具の出し入れが少なくしたりするなど、子ども自身が工夫して遊べる環境、遊びの続きが保障される環境となるよう工夫を重ねることで、主体的に環境と関わり、学びが深くなっていきます。

⑤　保護者や地域の人々との連携を活かす

事例 13：保育を丁寧に伝える工夫と保護者の保育への参加・・・・・・・・・・43
（子どもの育ちを保護者に分かりやすく伝え、保護者の保育への参加が進んだ取組）

事例 14：子どもの遊びや活動の実現のために、
保護者や地域の人々との連携を活かす・・・45
（子どもの育ちの姿の発信が地域の人々とのつながりに発展し、保育が充実した取組）

【事例 13】保育を丁寧に伝える工夫と保護者の保育への参加

この事例のポイント

写真を中心にした記録を保護者に発信 ➡ 保護者に保育が伝わり対話も増えてくる ➡ 園と保護者が一緒になって子どもを育てるという意識が高まる

写真や文章による子どもの育ちの記録を保護者に分かりやすく発信することで、保護者が園の保育にも関心を持ち、参加しやすいようになり、保育の質の向上にもつながります。

記録の発信の実際

子どもの姿を多面的に伝えるために

以前から、0 才児から 5 才児まで個人の連絡帳を使用して子どもの育ちを伝えていましたが、文章だけでは伝わりにくい部分があったため、写真を活用し、その子の集団の中での関わりや、見えにくい育ちなどを保護者に伝えられるようにしました。

写真は具体的に子どもの姿や保育の様子を伝えることができます。

ポイント

午睡の時間などを利用して作成

記録を継続的に発信するために

記録の発信は保育の中で子どもが興味関心をもって取り組んでいる場面や育ちを感じた瞬間などを写真で撮影し、文章を加えて作成します。1 歳児以上のクラスでは遊びの盛り上がりなどに応じて週に数回発行し、保護者が気付きやすい廊下に掲示、配布をするようにしました。

実際の作成は子どもの午睡時を利用して、パソコンや手書き、手書きのイラストを挿入するなど保育士のやりやすい形式で取り組んでいます。継続的に発信できるように、また内容に応じられるようにあえて形式は決めないでいます。

また、園長や主任が事前に記録を確認することで子どもや保育をさらに理解し、園長らも子どもや保護者に声をかけられるようになっています。

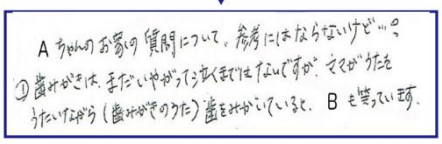
一度きりではなく、続けて発信できるようにあえて書式を決めずに、保育士のやりやすい形式で作成しています。

ポイント

記録を見る親子

記録を通して、
保護者や子どもと対話する

歯みがきを嫌がる・・・



保護者の悩みに他の保護者が回答
（リプライ）

保育参加で子どもと遊ぶ保護者

記録の発信による保育士・保護者の変化

写真と文章による記録の発信を始めてから、保育士にも変化が見られるようになりました。それまでは「子どもの姿」だけを伝えようとしていたのが「子どもの学びは何か？」を考え、保護者に伝えるようになってきたのです。

また、発信する記録は、子どものいいことばかりではなく、たとえば喧嘩の場面なども取り上げるようにし、子どもたちは様々な体験の中で多くのことを学んでいることを理解してもらえるようにしています。

発信を続けていくと、保護者は自分のクラスの記録だけでなく違う年齢のクラスの記録をみる人もいて、「こんな風に大きくなるんだ」「懐かしい」と我が子の数年先を見通したり、振り返ったりしながら、子育てのヒントにするようにもなってきました。

発信を続けることで保育士の意識も変化し、
専門性の向上にもつながります。

ポイント

保護者が保育に参加しやすくなる

また、記録に対する保護者からのリプライも発信（許可はとる）することもあります。保護者の意見やアイデアもあわせて発信することにより、リプライした保護者はもちろん、それをみた他の保護者もさらなるアイデアをくれるようになるなど、保育に参加する意識が高まってきています。

さらに、記録の発信をきっかけに園の保育がより分かるようになったことから、以前から実施していた保育参加の希望が増え、園と保護者が一緒になって子どもを育てるという意識が高まったように感じられています。

写真などを使った記録の発信をすることで保育が
身近に感じてもらえます。

ポイント

実践に活かすためのヒント

○文字だけでなく、写真が加わることにより、保育や子どもの育ちが分かりやすくなります。
○写真や文章による記録を通して、ただ見るだけでなく、保護者や子どもと対話が生まれます。
○写真や文章による記録で保育が分かりやすくなると興味をもつ保護者が増えてきます。
○ある保護者の悩みを共有し、他の保護者が答えたことも併せて発信することで、保護者が保育に参加する意識の高まりが見られます。

【事例 14】子どもの遊びや活動の実現のために、保護者や地域の人との連携を活かす

この事例のポイント

子どものしたいことを実現するため、試行錯誤していた ➡ 育ちの記録をみた保護者が情報提供してくれた ➡ 分からないことは地域に出かけて調べるなど、地域の人々ともつながる

子どもたちの活動や思いを保護者に伝えたことで、保護者が情報提供し活動が発展すると共に、地域に出かけることで子どもたちがしたいことを実現していった事例

活動の始まりは子ども。一人の粘土造形をきっかけに器作りがブームになります

保護者から教えてもらったオーブン粘土で陶器の食器を作っています

アイデアを見える形にすることで、子ども自身が進める助けになります

粘土造形から展開した活動

- 陶芸教室に行ったことがあるＫ（５歳児）が作った油粘土の器に他の子どもも興味をもつ
- Ｋが作り方を教えて、茶碗など器作りがブームに
- Ｓ（４歳児）が「作ったコップでお茶を飲みたい」と言い、紙粘土でコップを作ってお茶を注いだが、粘土が溶け出してしまい失敗してしまう

⬇

- 保育士が子どもの試行錯誤を「育ちの記録」にし掲示
  → 保護者が陶器用の粘土があることを教えてくれた
- 陶器のコップを作り、お茶を飲むことに成功

⬇

- 様々な手作り食器で食事をするようになる
- Ｓが家族にも手作り食器で飲み物を飲ませたいと言う
- 朝夕の集まりの時間（３歳以上児で実施）に、Ｓの思いを共有し、子ども同士で話し合う
- 「ジュース屋さんを開いてお家の人を呼ぶ」「刺繍でコースターを作る」「染物でエプロンを作りたい」など、これまでの遊びを生かした意見が出る

- 各自が得意分野を生かして準備を進める
- アイデアは、図など見える形にして表す
- 集まりの時間には、進捗を共有しあう
- 店員役の子どもたちは、地域のカフェに出かけて、分からないことを教わる

⬇

- 保護者を招き、ジュース屋さんをオープン
- 予想より忙しく仕事の大変さも知ったが、大きな達成感を得た。

子どもがやってみたいと思ったことを、どうしたら実現できるのかを、保育士が子どもと一緒に考える中で、保護者や地域の人々とつながっています。

ポイント

自分たちでは分かり得ないことは地域のプロに相談。カフェに見学に行き質問しています

ジュース屋さんオープンの日

保護者とのつながり

保育参加日などは設定せず日常的にいつでも保護者の参加を受け入れられるようにしています。また、写真と文章による「子どもの育ちの記録」や「子どもの思考を可視化した図」を保護者向けに掲示し、子どもたちがどんなことに興味をもっているのか、何が盛り上がっているのか見える形にしています。写真と文章による子どもの育ちの記録で子どもたちの様子を知った保護者が、大人としての経験からの提案をしてくれ、それがきっかけとなって子どもたちの遊びが大きく展開していきました。保護者にまず発信することで、保育に関心をもってもらうこと、また保護者自身が保育の参加メンバーとなれる環境・雰囲気を作ることが、保護者が理解者・参加者になる第一歩なのではないかと思っています。

保護者に子どもたちが興味をもっていることを発信することが、保護者に理解者・参加者になってもらう一歩となっています。

ポイント

地域の人々とのつながり

当法人には園内で始まった活動の中で、困ったこと、分からないこと、子どもたちの経験知では解決できないことが起こると地域に出かけ、様々な経験値をもった方から学ぶという文化があります。地域に出かけることは、経験の幅を広げるだけでなく、自分たちの地域を知ること、地域の人・モノが保育の資源として活かされることにも繋がっていくのではないのかと考えています。保護者・地域の人々と繋がることは、身近な大人への憧れにも繋がっています。園内だけでなく、保護者・地域の人々を含めた広い意味での保育環境の中で豊かな経験をすることが、子ども一人一人の成長を支えてくれるのではないでしょうか。

地域の環境を生かすことで、子どもの遊びが豊かになり、子どもが地域の人々とつながっています。

ポイント

実践に生かすためのヒント

○子どもが興味や関心をもっていることを、さらに膨らませたい・展開できるようにしていきたいという願いや思いをもつことが始まりです。それを保護者や地域の人々に向けて発信してみることが大切です。

○園内での掲示・図鑑やインターネット等の活用などに加え、子どもの興味関心と園外の様々な資源（人・モノ・場所）をつないでいく視点をもってみましょう。

本事例集の作成に当たっては、以下の方々や園の関係者にご協力いただき、厚生労働省子ども家庭局保育課が編集を行いました。

≪作成協力者≫

大豆生田　啓友　　玉川大学教育学部教授

古賀　松香　　京都教育大学教育学部准教授

汐見　稔幸　　東京大学名誉教授

田澤　里喜　　玉川大学教育学部准教授

中山　美香　　高知県教育委員会事務局幼保支援課専門企画員（※）
（※2019（平成 31）年４月より、高知大学教育学部附属幼稚園副園長）

野澤　祥子　　東京大学大学院教育学研究科附属発達保育実践政策学センター准教授

普光院　亜紀　　保育園を考える親の会代表

松井　剛太　　香川大学教育学部准教授

箕輪　潤子　　武蔵野大学教育学部准教授

村松　幹子　　社会福祉法人東益津福祉会たかくさ保育園園長

（五十音順、敬称略、職名は 2018（平成 30）年 10 月１日現在）

≪作成協力園≫

えひめ乳児保育園　　社会福祉法人後世福祉会　（愛媛県松山市）

北区立西ケ原保育園　（東京都北区）

さくら保育園（※）　社会福祉法人倉梯福祉会　（京都府舞鶴市）
（※2019（平成 31）年４月より、「さくらこども園」）

世田谷仁慈保幼園　　社会福祉法人仁慈保幼園　（東京都世田谷区）

鳩の森愛の詩瀬谷保育園　社会福祉法人はとの会（神奈川県横浜市）

ベネッセ日吉保育園　株式会社ベネッセスタイルケア　（神奈川県横浜市）

村山中藤保育園「櫻」 社会福祉法人高原福祉会　（東京都武蔵村山市）

（五十音順、園名は 2018（平成 30）年 10 月１日現在。括弧内は園の所在地）